



輝く女性  
応援会議

# キラリ! 花咲く物語

～「女性のチャレンジ賞」受賞者の軌跡～

変わる! 変える!

# 女性のチャレンジ賞 受賞者 座談会

新しいことを始めるとき、自分が変わるか? 周りを変えられるか? と希望と不安を感じながらチャレンジするものだと思います。今回の座談会では、新しいことにチャレンジし、そこで出会った人たちとの縁を大事にしながら、今もがんばり続けている受賞者の方にお集まりいただきました。始めたきっかけや、周りの方のサポートなど、率直に語っていただきました。

インタビュー

はぎわら  
萩原なつ子さん

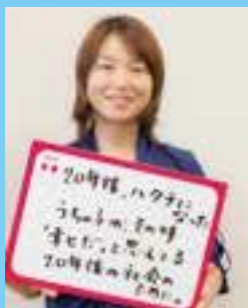


山梨県石和町(現笛吹市)生まれ。宮城県環境生活部次長、武蔵工業大学環境情報学部助教授等を歴任。現在、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授、認定特定非営利活動法人日本NPOセンター副代表理事。平成20年より女性のチャレンジ賞選考委員会委員。



認定特定非営利活動法人  
カタリバ代表理事

いまむら くみ  
今村 久美さん



岐阜県高山市生まれ。大学在学中の平成13年に任意団体NPOカタリバを設立し、高校生のためのキャリア学習プログラム「カタリ場」を開始。平成23年度には東日本大震災を受け、被災地域の放課後学校「コラボ・スクール」を発案。平成21年度(第6回)女性のチャレンジ賞受賞(受賞時29歳)。

特定非営利活動法人全国福祉  
理美容師養成協会事務局長

いわおか ひとみさん  
岩岡 ひとみさん



大阪府堺市生まれ。17歳で妊娠・結婚出産のため、進学校中退。平成16年に子育てしながらネイリストとして美容室勤務中に、訪問理美容活動に参加。感銘を受け、訪問理美容を普及させたいとの思いから、ヘルパー2級・美容師国家資格取得。愛知学院大学経営学部非常勤講師。平成24年度(第9回)女性のチャレンジ賞受賞(受賞時33歳)。

特定非営利活動法人  
「ディサービスこのゆびと〜まれ」  
理事長

そうまん かよこ  
惣万 佳代子さん



富山県黒部市生まれ。平成5年赤ちゃんからお年寄りまで障がいがあっても無くても利用できるディサービスとして、このゆびと〜まれを開所。今では地域共生ホームが富山県内105か所、全国に1,400を超える事業所がある。また平成25年「とやま地域共生型福祉推進特区」を活用した就労継続支援B型事業所「はたらくわ」をスタートさせる。平成16年度(第1回)女性のチャレンジ賞受賞(受賞時52歳)。

特定非営利活動法人  
スペースふう理事長

ながい ひろこ  
永井 寛子さん



山梨県増穂町(現富士川町)生まれ。平成7年町議会議員に初当選し、4期15年務める。平成11年、仲間と共に地域活性化を目指し、リサイクルショップ「スペースふう」を立ち上げる。平成15年、リユース食器のレンタル事業に業種転換、現在に至る。平成20年度(第5回)女性のチャレンジ賞特別部門賞(環境)受賞(受賞時61歳)。

## はじめに

この冊子は、これから何かにチャレンジしようとする女性のための「事例集」です。

起業したり、NPOを立ち上げたり、従来女性が少なかった分野で活躍の場を広げ、「女性のチャレンジ賞」を受賞された方々がいます。この冊子で紹介している方々は、元会社員、専業主婦、農家、学生など経歴も、受賞当時の年齢も、活躍している地域も様々です。「どのようなきっかけでチャレンジしたのか」、「転職にどのような周りの支えがあったのか」、「今後どのような活動をしていこうとしているのか」などをお聞きしました。本冊子が、様々な分野で活躍しようと考えている女性を後押しする一助となれば大変幸いです。

## 【女性のチャレンジ賞とは】

起業、NPO法人での活動、地域活動等にチャレンジすることで輝いている女性個人、女性団体・グループ等を顕彰し、チャレンジの身近なモデル等を示すことによって男女共同参画社会の実現のための機運を高めることを目的とし、内閣府において、平成16年度から実施しています。

平成26年度までに、「女性のチャレンジ賞」48個人・団体、「女性のチャレンジ支援賞」14団体、「女性のチャレンジ賞特別部門賞」33個人・団体が受賞しました。

## 目次

女性のチャレンジ賞受賞者 座談会	1
今村久美さん(東京都)、岩岡ひとみさん(愛知県)、惣万佳代子さん(富山県)、永井寛子さん(山梨県)	
海野フミ子さん(静岡県) 「分厚い壁を破って女性を農村の表舞台に」	6
佐野ハツノさん(福島県) 「復興の希望を胸に「までい着」を」	8
中橋恵美子さん(香川県) 「地元密着型の子育てをこれからも支えていきたい」	10
橋本正恵さん(大分県) 「海と山の「楽園」蒲江に生きる」	12
光畑由佳さん(茨城県) 「子連れ出勤とおっぱいが日本を救う!」	14
村山由香里さん(福岡県) 「女性がやりたいことをあきらめず、才能をのびやかに発揮できる社会を作りたい」	16

## 活動を始めたきっかけ

**司会**(萩原なつ子さん、以下司会)

今日は、過去の女性のチャレンジ賞受賞者の中から4名の方に座談会に出席いただきました。まずは、自己紹介と活動を始めたきっかけを教えてください。

**惣万佳代子さん(以下、惣万さん)**

私は富山の病院で20年間看護師として働いていました。お年寄りは一家に帰って死にたいと言われ、看護師として力になれないものかと思いい病院を辞め、仲間と在宅支援のデイサービスを始めました。地域の子どもからお年寄り、障害者の方たちも一緒にデイサービスをしたいと思いましたが、それぞれ法制度が違うため、初めは行政の方たちに理解してもらえませんでした。今では行政と一緒に活動し、特区を申請し、規制緩和につながっています。平成5年に始め



萩原なつ子さん

た、子どもも、お年寄りも、障害者も利用できる「富山型デイサービス」は、富山県下で105事業所、全国で1,400を超える事業所(平成26年3月)が存在します。市を動かし、県を動かし、国を動かし、来たというところで、賞をいただいたのではないかと思います。

**司会** 永井さんも行政との連携、協働を視野に入れながらスタートされたと思うのですが、いかがでしょうか。

**永井寛子さん(以下、永井さん)**

私は平成7年に町議会議員になり、今年4月まで続けてきました。途中4



惣万 佳代子さん

年間ブランクがあったのですが、そのときに仲間たちとコミュニティ・カフェというところで、町の拠点づくり、集いの場づくりを始めました。平成13年にたまたまドイツから帰国した環境ジャーナリストの講演で、ドイツではどんな大きなイベントでもリユース食器を使い、ごみは出さないという話を聞き、自分たちでもできないかと考えました。NPOの理事会でリユース食器のレンタル事業を始めないかと提案したところ、「お金もないし、そんなことができるわけがない」と最初は反対されました。1年間調査研究をし、可能性を皆で確認してから、リユース

等、幅が広がってきました。

## 男性からのサポートや、企業の支援

**司会** 4人のお話を伺っていると、いろいろな意味での転機や出会いがあると思います。例えば、夫の後押しという話がありました。男性からのサポートは何かありましたか。

**惣万さん** 最初、病院を辞めてデイサービスを始めるという話を友達に話したら、その友達が、栃木に住んでいた男性の友達に話をしたので。そうしたら、その人がとても感動して富山まで来てくれて、「あなたたちには何が一番足りないのか」と聞くので、正直にお金が足りないと言ったら、東京で銀行口座を作って、全国のいろいろな方に声をかけ、お金を集めてくださいました。男の人は、どの人も最初は、「無理だ。事業にならないことはするな」と反対するのですが、いざ始めようとしたら力になってくれました。男性は、いざとなったら支えてくれるのですが、だからと言って、男性が行動できるかと言ったらできない。男性が5年後、10年後、20年後を考

えるのに対して、女性は、経済とか、お金を考えず、先に行動してしまう。それが女性が社会を変えていくことだと思っています。

**永井さん** 同感です。私たちも無知で、世間を全く知りませんでした。無知は最大の武器だと思います。最大の難関はやはり資金調達です。資金

食器のレンタル事業を始めました。日本ですらなかったということ。平成15年には、経済産業省のモデル事業に採択されました。その後、リユース食器のレンタル事業1本で活動しています。

**今村久美さん(以下、今村さん)**

正直な話、賞をいただいたときは、「女性なのになんか褒められている」と言われているような気分。でも違和感がありました。女性だからという理由で、特別苦労したわけではないのに、と。でも、授賞式で先輩たちのスピーチを聞いて、先輩方の苦労によって、私たちは、違和感を持たずにやりたいと思える仕事を選択することができると。世代になつてきているのだということ。初めて知りました。私は岐阜県高山市で生まれて、実家は土産物屋を経営していました。両親も親戚も大学の人はいない環境でしたが、関東の大学に進学し、そこで、世の中には実は格差があるのだということに気づきました。教育の機会は均等だけれども、何かチャレンジしてみようと思える機会や、それを思う前提となる生活環境には格差があるということ。何か解決できる方法を見つけたと思います。それでカタリバという団体を始めて、地域の年齢の近いお兄さん、お姉さんが、縦の関係ではなく、斜めの関係と呼んでいるのですが、そういう人たちと高校生が人生

調達をどうするかといったときに、いろいろなめぐり合わせで手を差し伸べてくれる人たちがいました。私の場合は、たまたま地元企業の社長が、私たちの話を聞いてくれる機会を持ってくれて、社長室で「私たちはこういうことをやりたい、それには資金が足りないんです」と言いました。後から考える



の話と一緒に語り合う場を作っています。

**司会** 岩岡さんはいかがでしたか。

**岩岡ひとみさん(以下、岩岡さん)**

私は皆さんと違って事務局長という立場なので、いわゆるナンバー2です。私自身は、17歳で子どもを産みました。高校は愛知県にある進学校に通っていたのですが、恋に落ち、子どももできて、夫は7年上で仕事をしていたので、結婚して、普通に奥さんになった方がいいと思いました。3年間専業主婦をしていましたが、夫から社会に出たらどうかと言われ、ネイルのスクールに行きました。その後、た



岩岡 ひとみさん

またま現在の理事長と出会い、訪問理美容活動を始めました。美容師の免許を取るために通った専門学校で、10歳くらい年下の女の子たちが、美容師は土日もなく就業時間が長いので、「私たちは就職しても、子どもを産んだら働くところがないんです」と言っていて、キャリアを積んで、手に職がある彼女たちと介護施設の仕事はマッチングできる、仕事になると思いました。活動をやっていく中で、支援対象も高齢者だけではなく、障害者の方の就活支援やがん患者さんのためのかつら作り、美容の技術を途上国の貧困層の若者に教える活動

と、何という向こう見ずなど思うのですけれども、その社長はじつと最後まで聞いてくれて、聞き終わったら、お手伝いしましょう、支援しましょうと、その場で約束してくれました。それがなかったら、事業を立ち上げることはできなかった。私たちは主婦の集まりだったので、その方は、資金面で協力してくれただけでなく、その後、経営戦略会議を持つてくれて、今に至るまでずっと支えてくれました。自分たちは何もなければ、相談できる人はいる。周りにそういう人間、人脈を持つということは、すごく強いことだと思っています。

**司会** 今のお二人の話を聞いてどうですか。

**岩岡さん** うちの理事長は、今はやりの「イクボス」です。会社や上司が育児に理解があり、キャリア面でもチャンスを与えます。例えば海外の研修に行く機会を私に譲ってくれ、そのおかげで、仕事を任せてもらったりしています。こういうナンバー1が増える、必ずしも強い信念や課題意識を持つていない人でなくても、誰かの応援をしながら、活躍する機会がもつと増えるのではないかと思います。女性の活躍の場として、私のように、二番手、三番手として活躍する余地がもつとあるといいなと思います。

### 受賞したことがもたらした変化

**司会** 女性のチャレンジ賞を受賞し、ご自身あるいは団体にどのような変化があったのか。また、地域にメリッ トがあったのか、この辺りもお聞かせ

にしようということで、町と協働を始めました。受賞がこのきっかけになったと思います。

**司会** 社会的に認知されることによつて活動が認められ発展していくケースと、永井さんたちのように、自分たちを見直すきっかけになっていくケースの両方がありますね。惣万さんはいかがですか。

**惣万さん** 富山型デイサービスと言ったら、富山県下の人ほとんど知っていると思います。これは、賞を取ったからというだけではなく、理念が普及して、富山を共生社会にしようという取り組みをしているからだと思います。民間も行政の力が必要です。何やかん



今村 久美さん



永井 寛子さん

ください。

**今村さん** 先ほど申し上げたとおり、先輩たちが開いてくれた道を私たちが歩んでいることを私自身が学べたというのが一番大きかったです。受賞以降、内閣府や文部科学省の委員に声がかかるようになったので、これに選ばれたのがお墨つきになっているのかもしれないと思います。社会が認めてくれる、お墨つきをいただけるというのは、「変人」だと思われているはずのことを、世の中が認めていることなのだとうれしかったです。周りが喜びました。

**岩岡さん** 私のところもNPOなのに美容という、NPOの中でも変わった

や言っても一緒にやっていたいかなければならないし、行政の方たちも、民間に力を求めてくれるのは、発想力や柔軟性が自分たちに足りないかと分かっているからでしょう。民間と行政が一緒にやることによって、1足す1が2ではなくて、3になったり、5になったりする。これが社会を変えていくのではないかなと思います。継続は力なりで、一発花火ではためなので、やるからには、10年、20年単位でやっていかなければならないと思います。

### 多様な形で「活躍」できる社会を

**司会** 今村さんと岩岡さんは20代で

人たちがなんです。美容業界でも、福祉や介護というところ、変わっている人たちだと思われて、どちらにせよ居場所がない感じで、地味な活動をずっとやってきました。こういう賞をいただけることで、団体としての認知が上がるのはとても意味のあることで、私自身よりも、団体としてチャンスを得ただけで喜ぶ。個人的には、娘も単純に喜ぶ。私は学歴もないですが、そういう人でも社会が認めてくれる、チャンスがもたらえるという意味でいいと思います。

**永井さん** 私たちは、環境大臣賞や山梨県の県政功績者表彰もいただきました。新聞にも載りましたが、地元

活動を始めたわけですが、次に続く若い人たちについて何か思うことはありますか。

**今村さん** 私が22歳で起業した13年前よりも、今のほうが、社会的な課題を解決することをビジネス的に解決していかうとする分野に、かなり多くの若い人たちが入ってきているという実感があります。女性、男性にかかわらずなのですけれども、女性もか



の方はほとんど無関心なんです。町長から「スペースふうはよそに行く」という話を聞いて、これはまずいと思いました。私たちが活動を始めたのは、地域を元気にしたいということでした。もつと地元を軸足を置いた活動をしっかりしなければいけないと気づかされました。現在は、リユース食器レンタル事業を地域にもつと根づかせた活動

なり多いと思っていて、せっかくな一回の人生だから、自分が問題だと思うことを解決していくことで自分の生業を立てていこうと選ぶ人たちが増えているのはうれしいです。

**岩岡さん** 今村さんのように、リーダーとして自分がやりたいと思うことを始めた人たちに憧れて、私たちががんばろうという若い世代もいると思うのですけれども、そういう人は少ないと思います。やはり、すごくハードルが高い。社会起業家というほどでなくても、仕事と家庭を両立しながら社会のために何かやるというような、多様なキャリアパスのモデルがもう少しあるといいと思います。今はそういうところにフォーカスが当たっていないと感じています。リーダーの右腕としてだったらがんばれるみたいな女性に、チャンスを与える支援策があると思うんです。

**今村さん** 私も仕事を一人でしているわけではないので、メディア等の取材も、代表でなくてもいいものは、できるだけ別のスタッフに代わるようにしています。起業する人というのは、自分がやりたくて始めているのですが、岩岡さんのように、その人たちの思いを形にしていくところに優秀な人が入ることの方が大切だと思います。そういう人にもつと光が当たるようなものがあるといいですね。

**司会** 今日は、女性のチャレンジ賞を受賞された方たちにお集まりいただきまして、多岐にわたるお話を伺いました。楽しいお話をありがとうございました。

# 分厚い壁を破って 女性を農村の 表舞台に

地元農産物の直売や消費者との  
交流活動を通じて、女性の力で農村を元気に



静岡市  
農業協同組合理事  
JA女性部販売所  
アグリロード美和代表

## うんの 海野 子氏

略歴 静岡県静岡市出身。茶農家後継者と結婚。平成7年、JA静岡市美和支部の女性部  
支部長に就任し、女性部による朝市の開催や、農産物直売所・加工施設「アグリ  
ロード美和」の開設などを主導。地元農産物を活かした「生消費言弁当(せいしょうなごんべんとう)」を  
発案・ヒットさせる。平成12年、JA静岡市の女性総代を20%にすることを実現したほか、自  
身もJA静岡市初の女性理事として、農協の経営・方針決定過程への女性の参画拡大に取り組む。

JA静岡市女性部販売所  
「アグリロード美和」

JA静岡市美和支部の女性部の朝市活動を  
母体として、平成10年、常設の農産物直売  
所「アグリロード美和」を開設。生産者と消  
費者が野菜について語り合う「生消費言  
倶楽部(せいしょうなごんくらぶ)」を立ち上げ、  
消費者との交流活動や地元農産物を活か  
した商品開発を展開。年間約1億円を売り上  
げる直売所に成長している。



年表

**49歳**  
静岡市農業協同組合(JA静岡市)美和支部の  
女性部支部長に就任

**50歳**  
農産物加工センター及び朝市を開始

**52歳**  
農産物直売所・加工施設「アグリロード美和」  
開設

**54歳**  
JA静岡市女性部支部長に就任。JA静岡市の総代  
の約20%を女性に

**59歳**  
JA静岡市初の女性理事に就任

**61歳**  
平成19年度(第4回)女性のチャレンジ賞受賞

夫の活躍を支える中で深まった、  
地域の女性たちの絆

私は農協女性部の活動を通じて、地  
域農業の振興や、農協の経営・方針決  
定過程への女性の参画拡大に長く取り  
組んできました。私の原点は、夫と一緒に  
農業をしながら、地域活動や農協と  
いう組織の中で、夫が地位を得られる  
よう活躍を支えていくこと、それが自  
分の役目だという思いでやってきました。  
町内会長、PTA会長、消防団長など  
に夫が就くと、それぞれの役職で、どん  
なふうにも実績を上げられるかと考えま  
した。例えば、夫が消防団長の時、消防  
団の県大会で優勝を目指すことになり  
ました。そこで、団員の妻たちで集まり、  
団員を支えるためにはどうしたらいい  
か話し合いました。普通、毎日夫が練  
習に出かけていくとなると、嫌な顔をし  
たり、愚痴を言いたくなったりするもの  
です。でも、そこを「練習がんばってね」  
と言って夫を送り出し、早朝の練習には  
お弁当や味噌汁などを差し入れて応  
援しよう、女の人も愚痴を言わないよ  
うにしよう決めました。その甲斐あつ  
て、県大会では見事優勝を勝ち取りま  
した。団員の中には、「母さんたちの支  
えのおかげだった」と、涙を流して喜ん  
でくれた人もいました。こうして夫の活  
躍を支える中で、地域の女性たちとの  
団結も深まり、これが後の女性部での  
活動につながっていききました。

農協女性部の支部長として  
実績を上げ、女性を意思決定の場へ

平成7年、JA静岡市美和支部の

502名の総代のうち20%を女性にす  
るということは、約100名の男性に退  
いてもらうということですから、簡単  
なことではありませんでした。しかし、  
朝市や直売所の成功や、選挙運動で  
も女性部の活動が高く評価されてい  
ることなどから、当時の組合長をはじめ  
として、男性たちもこれからは農協の  
運営に女性を入れていかなければなら  
ないと理解してくれました。こうして、  
総代の任期が入れ替わる時に、100  
名以上の女性総代が誕生しました。皆  
初めて総代になるので、知識や経験の  
不足を補うため、農協の運営や貸借  
対照表の読み方、インターネットから  
の情報収集など、女性を対象に研修  
も行いました。さらに、美和地区では、  
総代会の前に女性総代が集まり、事前  
勉強会を開いてきました。100名を  
超える人が出席する総代会で、しかも  
ずらりと並んだ役員の前で発言するの  
はとても大変なことなので、誰がどのよ  
うな意見を出すかあらかじめ相談し、  
当日まで発表の練習をしています。男  
性の中には、持ち回りの役職だからと  
総代会を欠席する人もいますが、女性  
はそうではありませんから、女性総代  
から活発な意見が出るようになって、  
総代会の雰囲気も変わりました。

女性が生き生きと働ける農協に

平成17年には、JA静岡市で初の女  
性理事に就任しました。夫は、「女性が  
理事になってもあまり歓迎されない  
と思うが、男と同じようにやって、報  
酬も好きに使えばいい」と言っていて、私  
が役員に就くことを理解してくれました。

女性部支部長という話をいただきま  
した。その頃、女性部では部員が減少  
していて、活動の活性化が急務でした。  
そこで、「美和の活性化検討チーム」と  
いうプロジェクトを立ち上げ、地区代表  
者と農協職員を中心に役員の方  
を見直したり、部員の要望を聞くため  
アンケートをとったりしました。

その中で、朝市をしたいという声  
が非常に多くありました。農産物の価格  
が低迷していたことや、安心・安全な  
農産物を消費者に提供したいという問  
題意識などを背景に、女性たちの熱い  
思いを実現したいと考え、農協に働き  
かけて、平成8年から朝市を始めまし  
た。平成10年には常設の直売所・加工  
施設「アグリロード美和」を開設し、女  
性たちが楽しく活動しながら、仲間づ  
くりをするのと同時に、収入を得ること  
を目標にやってきました。消費者との  
交流活動にも積極的に取り組む中で、  
消費者の意見を取り入れた「生消費言  
弁当(せいしょうなごんべんとう)」が  
ヒットするなど、部員のがんばりのおか  
げで売り上げは順調に伸び、1億円を  
達成するまでになりました。

平成12年、JA静岡市女性部の部長  
に就任した時、「総代会」という農協の  
最高意思決定機関にオブザーバーと  
して出席しました。そこで、総代に女  
性が一人もいないことに非常に違和感  
を覚えました。それまではそれが当  
り前で、不思議に思わなかったのです  
が、農業者の半分は女性が占めている  
のに、なぜ意思決定の場にはいないのだ  
ろうかと。そこで、総代の20%を女性に  
してほしいと、農協に訴えました。

これまで夫をはじめ、家族を支えてき  
たことを見てくれた、ということも  
あるのだと思います。その後、国でも女  
性役員の登用を促進していることもあ  
り、現在は3人の女性が理事になってい  
ます。

さらに今年、女性部から、農協の常  
務への立候補を要請され手を挙げまし  
たが、「女性がなったためしがない」と言  
われ、当選できませんでした。これまで  
女性たちが活動を通じて築いた実績が  
あるにもかかわらず、男性が就いてき  
たという慣習が変わることには、根強  
い抵抗があると感じています。

一方、JAの管理職・役員への女性  
登用と同時に取り組んできたのが、育  
児休業から復帰する女性の短時間勤  
務です。法律で制度があっても、実際  
には女性たちは職場に遠慮して、言い  
出せない状況がありました。ある時、  
大変優秀な女性が育休から復帰する  
ことになったので、「あなたなら辞めさ  
せられることはない。一人では心細いな  
ら、何人かで一緒に取ればいい」と後押  
しをし、4人の女性が短時間勤務を同  
時に取得しました。今ではすっかり制  
度が定着しています。「農協は女性が  
働きやすい職場」というイメージを  
持つてもらい、女性が生き生きと働け  
ることはとても大事だと思っています。  
女性の参画拡大や、女性が働きやすい  
職場づくりを進めるには、古い慣習や  
男性の意識など、まだまだ分厚い壁が  
ありますが、女性の力を活かし、農村  
を元気にするため、今後も取り組んで  
いきたいと思えます。

(文・尾島有美)

# 復興の希望を胸に

## 「ままでいい着」を

仮設住宅で暮らす女性たちに  
生きがいと生活の糧をもたらす



の  
**佐野 ハツノ氏**

いいたてカーネーションの会代表

略歴 福島県飯舘村出身。平成元年、村内女性対象の海外派遣「若妻の翼」事業の一期生として、ヨーロッパ研修に参加。同8年から村の農業委員をつとめ、同14年に全国で女性初の農業委員会会長に就任。平成18年より、農家民宿「ままでいい着」を運営。東日本大震災後、避難先の仮設住宅の管理人として、住民の健康管理や交流促進に取り組む。現在、「ままでいい着」の製作・販売活動を通じて、女性の生きがいと雇用創出に取り組んでいる。



いいたてカーネーションの会

震災後、飯舘村の住民が避難した仮設住宅で、佐野氏が、入居者の交流と趣味の活動づくりのため、裁縫が得意な高齢女性に講師になってもらい裁縫教室を開くことを提案し、平成23年10月に発足。現在、高齢女性を中心に約20人が参加している。全国から寄贈された古着を村の伝統的な「ままでいい着」に仕立て直し、販売している。



年表

**40歳**  
「若妻の翼」事業に一期生として、10日間のドイツ研修に参加


**47歳**  
飯舘村の農業委員に就任

**53歳**  
女性として、全国で初めて農業委員会会長に就任

**58歳**  
農家民宿「ままでいい着 どうげ」を始める

**62歳**  
東日本大震災発生。ふるさとの飯舘村を離れ、福島市の松川工業団地第一仮設住宅へ避難し、住民約110戸の管理人に就任。いいたてカーネーションの会設立

**63歳**  
平成24年度(第9回)女性のチャレンジ賞特別部門賞(防災・復興)受賞



「若妻の翼」事業で  
芽生えたふるさとへの思い

私が生まれた福島県飯舘村は、決して裕福な村ではなく、貧しい中で、先祖が苦勞して村を築いてきました。そのため、村には、苦しい時には皆で助け合うという精神が育まれていました。

平成元年、農繁期の9月に農家の嫁を、ヨーロッパ(約10日間派遣する)「若妻の翼」事業が村で立ち上がりました。「女が変わって、男が変わり、そして村が変わる」というキャッチフレーズのもと、女性も視野を広く持つために考えられた研修旅行です。けれど、一年で一番忙しい時期に、農家の嫁が家を空けるのですから、参加したいと言うのは大変な勇気がいりました。区長さんが薦めてくれ、夫と姑も、「今までがんばったんだから行っておいで」と言ってくれましたが、周囲からは「忙しい時期にたいしたもんだ」という皮肉もきこえてきました。

「若妻の翼」に参加する前、私は農家の嫁は、朝から晩まで仕事ばかり、どこにも行けなくて辛いなと思っていました。そんなところに、誰もお嫁に來たいとは思いませんよね。

研修先の西ドイツでは、現地の女性との交流会や、女性のための駆け込み寺など様々なところを視察しました。そこで、自分の生き方に誇りを持ち、自分自身で問題解決に取り組む女性の姿に、大変感銘を受けました。自分の生き方ひとつで、地域で豊かな暮らしをつくることができるということに気付いたのです。それまで、農家の嫁は

らずつとやりたかったグリーンツーリズムに取り組みするため、自宅で農家民宿を始めました。都会から来る人に、特別贅沢なものを出さないけれど、村の自然の恵みを感じられる宿を目指しました。そして、ようやく民宿の経営が軌道に乗った頃、東日本大震災が発生しました。

「ままでいい着」の製作を通じて、  
女性たちに生きがいと希望を

震災後、村は全村避難となり、生活は一変しました。私が避難し、管理人になった松川工業団地第一仮設住宅は、約110世帯の半数近くが高齢者の一人暮らしでした。村にいた頃は、皆畑の手入れなどで忙しくしていましたが、仮設住宅では何もすることがありません。そこで、農作業ならできたらうと畑を借りましたが、遠くて移動の足がなかったり、高齢のため機械が使えなかったりで、うまくいきませんでした。家にこもりつきりにならないよう、芋煮会などで交流の場をつくりましたが、避難生活の中で体調を崩したり、認知症になったり、病気になる人が増えていました。

そんな中、毎日部屋で泣きじやくつているおばあさんがいました。私は毎日通って声かけをし、ある日とうとう根負けして出てきてくれました。その時着ていたのが、古着を仕立て直して縫った、上下に分かれた作務衣のような服でした。そこで、「あら、ずいぶん素敵な着物じゃないの。その縫い方、みんなに教えてくれない？」と頼みました。そうして裁縫教室の声かけをしたところ、

自分の意見を言うことは控えないといけないと思っていましたし、農業も指示されて動くという受け身でした。そうではなく、主張するべきことは主張し、周りの環境を変えていく、そうして皆で変わっていく、より良い村になる、そんなふうに見えるようになりました。

女性で全国初の  
農業委員会会長に就任  
「役割が人を成長させる」

帰国後はコンサートの開催に取り組みんだり、農業でも部門経営者として、経営に参画するようになりました。そうしていると、自然と周りが評価してくれるようになり、平成8年、村の農業委員にお声がかかりました。この時、議員の中に「女を出したら笑われる」と言う人がいたほど、農業の意思決定の場は男社会でした。また、上の世代の女性から強い風当たりもありましたが、同世代の女性たちは「あなたが目標になるから、私たちをひっぱって」と励ましてくれました。私は、「女ではダメだったと言われよう、一生懸命勉強し、努力しました。」

平成14年、今度は農業委員会の会長にこの話をいただきました。この時も周りの反応は同じようなものでした。選挙の結果、もう一人の男性候補者と1票差で私に決まりました。飯舘村の農業の将来をどうするか、農業委員会をいかに活性化するか考え、一生懸命取り組みました。振り返ってみると、与えられた役割が、自分を成長させてくれたと思います。

平成18年、「若妻の翼」に行った時か

また、ただ古着を縫うだけではなく、販売してはどうかと思い、売ってくれるお店もあちこち探しました。ようやく震災から1年後、首都圏のデパートで販売会を開けることになり、この着物を「ままでいい着」と命名しました。「ままでいい着」とは、手間ひまを惜しまず、丁寧に、じっくりと、つましく、という意味の福島方言です。物を大切にし、一針一針丁寧に縫って再生させる、そんな思いを名前に込めました。販売会では、持って行った「ままでいい着」が全て売れました。多くの女性にとって、夫ではなく、自分名義の収入が入るといのは初めての経験で、とても貴重なものでした。そして、気がつくとも最初の頃はつらい思いを抱えていたおばあさんたちが、ずいぶん元気になっていました。これらの活動は、支えてくれたボランティアの方々がいってこそ実現したもので、感謝の思いは言葉にし尽くせません。

今後について、この会の活動を続け、いずれ飯舘村に戻るようになった時、針仕事が生計の糧になることが目標です。苦勞もありますが、たくさんの方にいただいた応援へのお返しは、私たちが元気であること、活動を継続し、村の復興の一助になることと思っています。いつか村に戻り、先祖が苦勞して築いた村を子孫につなげたい。「ままでいい着」の製作は、村の復興という希望に向けた、大切な一歩になっています。

(文・尾島有美)

# 地元密着型の子育てを これからも 支えていきたい

お母さんの困りごとの  
ひとつ一つの物語が一番大切



なかはし えみこ  
特定非営利  
活動法人  
わははネット  
理事長

**中橋 恵美子氏**

略歴 平成10年、子どもとの遊びを中心にした育児サークルから、子育て支援のための情報発信を目的とした育児サークル「わはは(輪母)net」を仲間と呼び掛け旗揚げ。翌11年に子育て情報誌「おやこDEわはは」を発行。平成15年には親子のいこいの広場事業を始める。また、携帯電話を利用した子育て情報配信サービス「わははメール」事業をスタートし、翌16年には「子育て応援タクシー」事業を実施する。また、平成21年経済産業省のソーシャルビジネス55選にも選出される。ニッポン子育て応援団メンバー、文部科学省中央教育審議会臨時委員等を歴任。

**特定非営利活動法人わははネット**

平成10年地元香川県で中橋氏が子育てサークル「輪母(わはは)ネット」を設立。翌11年に香川県初の地域密着型子育て情報誌「おやこDEわはは」創刊。法人格取得後、親子のひろば(現:地域子育て支援拠点)を商店街の一角でスタートし現在3拠点運営。平成16年には子育てタクシー発案、全国に普及。同年スタートした携帯電話を使った子育て情報発信のシステムも全国に広がる。現在16名の雇用スタッフは全員女性。子育て・女性・まちづくり支援をしている。



**年表**

**20歳**  
建設会社就職

**25歳**  
つくば市にて、結婚・出産

**29歳**  
子育てサークル輪母(わはは)ネットを設立し、地域密着型子育て情報誌「おやこDEわはは」発行。その後、広場事業、情報配信事業を展開する

**33歳**  
わははネットに改称し、特定非営利活動法人の認証取得

**35歳**  
子育てタクシー事業の立ち上げ

**41歳**  
平成19年度(第4回)女性のチャレンジ賞受賞

**43歳**  
経済産業省ソーシャルビジネス55選に選出

**45歳**  
厚生労働省ポジティブアクション展開委託事業を受託



子どもがいたからこそ、今の私がある。発想の転換が大事。

私は、事業を行っている香川県の生まれ育ちなのですが、夫の仕事の関係で茨城のつくば市で、初めての子育てをしていた時に、実はとてもショックなことに気づきました。子どもが生まれると、もちろん子どもは可愛いし、一緒にいると嬉しいことばかりなのですが、その一方、子どもがいるとどうしても、あれも出来ない、これも出来ない、出来ないことが増えてしまったことがとても悲しかったのです。その後、ほどなくして家族で地元に戻りました。そこで出会ったママ友達と、子どもが生まれたことで当時、出来ないと感じていたことをどうすれば出来るようになるだろうとみんなで話しているうちに、子どもや旦那さんのためだけでなく、お母さんが自分らしく生きるためにみんなで活動しようと、ある意味、勢いで子育てサークルを立ち上げることになりました。普通の主婦だった私が、気がつけば子育て支援、お母さん支援の事業を展開しているのです。今の姿は、当時は想像もつきませんでした。これもひとえに、子どもがいたからであり、子どもがいてもこれまで以上に何事も出来るようにと考えて、行動してきたからにほかなりません。何事も発想の転換というか、見方を変えることがとても大事だなと思います。

今は、社会的起業とか、ソーシャルビジネスやコミュニティビジネスが注目を浴びてますし、そのような流れで私たちがは、事業主婦の集まりでしたが、そこに、働くお母さんからお手紙をいただきました。今で言うところの育児保育のケースなのですが、子どもが病気になる、職場や保育所をはじめとして多くのところに頭を下げなければいけない。子育てをしているのになんで、こんな後ろめたい気持ちになるんだろう。それがやりきれないと切々と訴えていました。「この人を助けない」「きつ」とこんな風に悩んでいる人はたくさんいるに違いない」と感じ、それならこのことを「香川県で一番偉い(!?)人に相談しよう」と思ったんです。そこで、情報誌の第二号に香川県知事インタビューを企画して、この手紙を読んでもらおうと考えました。今思えば、本当に無茶だなと思うのですが、何も知らない主婦がいきなり県庁に電話して「知事に会わせて下さい」と。秘書の方も困惑して「どんな業界の方ですか?」と聞くので、私は「お母さん業界です」と真面目に答えました。その後、紆余曲折ありましたが、当時の県知事にインタビューとお手紙を読んでもらう機会をいただき、このこともきっかけとなり香川県で初めて育児保育のサービスが展開されることになりました。本当に、嬉しかったですね。案外、社会って私たちでも変えられるんだと思いました。今で言うところの政策提言が、偶然出てしまったんです。

その後、妊娠中や乳児連れでのタクシー利用で苦労したという話を聞き、平成16年に、子育てにやさしい「子育てタクシー」の企画書を作り、地元タク

ちの事業が語られることも多いのですが、実は、当人たちにはあまりそんな意識はないのです。わははネットを立ち上げた当時、ここ香川県や高松には、子育て情報誌がありませんでした。東京発の情報が多く、生まれて間もない子どもを抱えている私たちが知りたい地元情報がなかなか手に入らなくて、困っていたのです。そこで、最初、地元のタウン誌を発行している会社に、地域密着情報誌の発行をお願いに行っただけです。ところが、ニーズがあるのはわかるけれど、売れるかどうかかわからないことに、我々はビジネスなので手は出さないとはいきり断られ、「世の中で一番お金を持つてないでしょ、あなたたち」と言われたんです。その一言が、とても大きかったですね。「だったら自分たちで作る!」と思ってしまうんですね。

このお母さんを助けて! というリアルな物語が行動のエネルギー

この分野で出会う方々には、社会を変えたい、社会はこうあるべきと思うので行動している人も多くいると思うのですが、私自身は、そこまで社会を強く意識しているというより、本当に困っている一人ひとりのお母さんを助けて、支えたいという気持ちが一番のエネルギーですね。そして、その困っているお母さんたちの物語は、私の体験でもあるのです。

子育て情報誌の第一号を発行してみると、とても多くのお母さんからお手紙や連絡をいただきました。当時、私

居酒屋わはは?をやりたい

現在も、立ち上げ当時と事業の柱は変わりません。でも、事業規模は本当に大きくなりました。乳幼児を対象とした、子育て情報誌(年6回)と子育てひろば事業、メールを中心とした情報発信事業の3つが今も基本です。それに加えて、最近では、ポジティブアクションの展開事業やワークライフバランス推進のための事業などに関わらせていただいています。私たちの強みは、地元密着で、かつ子育て中のお母さんの気持ちが一番わかっていることだと思っています。香川県では、まだまだ必要とされている事業だと思えますので、この3本柱をしっかりと運営しながら、新しい事業を展開して行きたいと考えています。

実は、私の夢は「居酒屋わはは」をやりたいんです。わははネットを通じて出会う、行政や企業の人をはじめ多くの人も、いろいろ悩んだり、愚痴をこぼしたかったり。そんなことを私はいろいろな聞いてあげたい。でも、タダではいやなので、居酒屋で時間を過ごす中で、そんな役回りが楽しいかなと思っています。

(文・船木成記)

# 海と山の「楽園」 蒲江に生きる

風と潮と天まかせ

海業で地域を元気に マーコ姉の物語



はしもと まさえ  
**橋本 正恵氏**  
有限会社丸二水産 取締役  
略歴 大分県佐伯市蒲江大字西野浦出身。昭和45年、橋本正恵商店を立ち上げる。昭和49年に丸二水産を設立。全国へ販路を拡大し新しいアイデアで事業を拡大。平成2年に「海の体験民宿 まるに丸」を始める。平成8年に蒲江町観光協会会長就任。平成18年、かまえブルーツーリズム研究会を立ち上げ、翌年「体感・学び」の大学「あまべ渡世大学」を開設。地元の魅力の発掘・発信と、自分たちで楽しめる地域づくりを目指して活動を広めている。

**年表**

**19歳**  
結婚。翌年長男誕生

**21歳**  
橋本正恵商店を立ち上げ、果物や野菜の卸売から魚介類の卸売へ

**38歳**  
全国の女性で初めて定置網の権利を持つ

**47歳**  
蒲江町観光協会会長就任

**57歳**  
かまえブルーツーリズム研究会発足(会長就任)

**57歳**  
平成18年度(第3回)女性のチャレンジ賞受賞

**59歳**  
農林水産省「農林漁家 民宿おかあさん100選」に選ばれる

**62歳**  
日本観光振興協会会長表彰受賞。「大分県研究会」の呼びかけ人となり立ち上げ時副会長に就任

**有限会社丸二水産**  
橋本正恵さんが20歳の時一人で立ち上げた「橋本正恵商店」が前身。魚介類の養殖・加工・販売のほか、食堂、旅館・民宿の経営、さまざまな漁業体験を提供している。現在の社長は子ども。淡水魚の海水養殖など常に新しい養殖の研究にチャレンジするのは次男、三男は海業体験・旅館民宿の切り盛りをする。一家で海と関わり地域で生きることを喜びとする。



東京から空路1時間半、その後バスを乗り継いで約4時間。緑の山々を抜けてようやく大分県佐伯市蒲江に到着する。豊後水道に面した風光明媚なリアス式海岸に位置し、静かな入江と豊かな漁場に恵まれた入津湾に面した蒲江西野浦は、昭和39年にトンネルができるまで他所に行く交通手段は細い林道と船だけだったという。海はずっと昔から、遠く中国大陸や韓国からも、この地域に様々な人・物・文化をもたらし、独自の文化を豊かに育んできた。

橋本正恵さんは、水産会社の役員、旅館と民宿のおかみさん、地元のブルーツーリズム研究会の理事長職など多忙なお仕事の合間を縫って蒲江の町を案内してくれた。橋本さんはすれ違う地元の方一人一人と明るい笑顔で言葉を交わす。ごくごく自然に、今日の労をねぎらい、明日の段取りを相談する。地元には橋本さんを応援するため自然発生的にできた「マーコ姉(ねえ)応援団」があるというがそれも領ける感じがする。

**困ったら、自分でなんとかするっきゃない。**

橋本さんが丸二水産の前身、橋本正恵商店を21歳ではじめたのは自分と生まれたばかりのお子さんとが食べていくためだった。夫は出稼ぎに出たままで生活は火の車。困ったときは、自分で何とかするっきゃない。子育てしながら真珠の珠入れの仕事に早朝から励んで得た資金を元手に軽トラックを購入。地元のミカンを積み込込

**民宿から地元観光協会会長、そしてブルーツーリズムへ**

平成2年に始めた民宿「まるに丸」は漁業に観光の要素を掛け合わせ、交流の拠点として、橋本さんが解体される直前の民家を買取り改造したものだ。その後地元の産業と観光の両方を知る人として平成8年に蒲江町観光協会の会長に就任。ここから公的な立場での橋本さんの活躍が始まる。

この頃橋本さんを力づけたのは平松守彦知事(当時)が始めた「一村一品女にまかせろ100人会」でスピーチしたこと。それが知事に「面白い」と評価され、思いがけないことが自信にもなり、そこで県内各地の地域を愛し活躍する女性たちと出会ったこともその後励みにもなったという。そして、一緒に丸二水産を育てるの場以後押しをしてきた地元の子供たちへの感謝が地元へのさらなる愛着につながったという。

観光協会会長としては、一村一品運動で地元の特産の一つでもあったノジギク(野路菊)の花いっぱい運動の展開や、マリンカルチャーセンターのプールに遊び心でマンボウを入れたところ押し寄せた観光客を「お腹をすかせて帰らせちゃいかん！」と立ち上げた「昼めし部隊」。今や県境を越えた海岸続きの宮崎県延岡市まで一緒になって展開する「伊勢えび祭り」(現在は「東九州伊勢えび海道」も大好評を博した。平成18年には「かまえブルーツーリズム研究会」を発足。人口8千人の町で一千八百人が登録したという。「子どもたちに地元の産業のすべてを伝えたい」)

んで佐伯市の市場で売り、今度は野菜を積み込んで村々で販売しながら帰る。やがて地元の魚介類を町の市場に運ぶように。販路を広げるため断崖絶壁の県境の道をトラックで宮崎県へも走った。電話営業で遠方からの注文もとり鹿児島、大阪、東京、東北まで貨物輸送で販売をした。貨物輸送が広まると今度は航空便で1日早く到着する方法で利益を上げた。さらに、大量の魚を一度に運べる「水槽車」を考案し、その後、夫が買った大型トラックを活かすため知恵を絞って考え付いたのが、酸素を送り込みつつ水槽で大量の魚を運ぶ「活魚車」だ。それまでに広めた販路と信頼とで一気に商品市場に送り込み事業を拡大させた。

豊後水道から入津湾の入り口にある丸二水産は水産物の加工場・出荷場であり、食堂・民宿であり、ご本人も含め3世代で住まわれるご自宅でもある。そして地域を挙げて技や知恵の伝承に取り組み「あまべ渡世大学」の教室でもある。加工場の基礎として海に面して石垣が積まれているがそれは袋にセメントを詰めて重ねたもので、橋本さんのアイデアだ。「40年前、丸二水産を立ち上げた時、女子衆(おなごし)も一緒に皆で積み上げたんだよ。みんな仕事があることを喜んで、楽しんで働いてましたよ。」女性でできるこのやり方はその後地域に広まったという。常に困った「自分でなんとかやるっきゃない！」溢れんばかりのアイデアウーマンである。

**先人の思いを継ぎ、地域の人がともに生きる、地上の「楽園」を**

地元のノジギクの植栽や渡世大学の設立には先人から受け継いだ地域の熱い思いがある。村の人たちが他所へ出稼ぎにいくのでなく、他所から人が来て店が賑わい村が栄えるのが良いと、他所との往来と地元の女子衆の働き場所を得るため創意工夫で旅館を切り盛りしたお祖母様。そのために村を美しい花と美味しい魚で楽園のようなところにしたとつねづね言っていたという。その思いを、父親が引き継ぎ、今また橋本さんが受け継ぐ。そして子どもたちの世代にも、美しく力強いふるさとを引き継ぎたい。

陰ひなたなく、筏の上で苦楽をともにした女子衆たちがずっと仕事をしながら幸せにくらせる場所にしたいの熱い思いも今の橋本さんを駆り立てている。年をとっても地域の人が知恵と技を活かして稼ぎながら笑顔で過ごせる場所を蒲江に作ることに、それが橋本さんの夢だ。橋本さんの世代を超え受け継がれた楽園の実現に向けた物語は、「九州風景街道」とともに、今も続いている。(文・高村静)



# 子連れ出勤とおっぱいが 日本を救う！

社会や時代を  
編集するという視点を大切にしたい



有限会社  
モーハウス  
代表取締役

みつ は た ゆ か  
**光畑 由佳氏**

略歴 お茶の水女子大学を卒業後、美術企画、建築関係の編集者を経て、平成9年の2人目の出産後、電車の中での授乳体験を機に「産後の新しいライフスタイル」を提案するため授乳服の製作を開始。その後、お産・おっぱいをサポートする「モーハウス」の活動を始め、「子連れ出勤」を古くて新しいワークスタイルとして提唱・実践し、多様な生き方や育て方、働き方を提案する「子連れスタイル推進協会」や、母乳生活全般の研究活動を行う「快適母乳生活研究所」を立ち上げる。三児の母。趣味はお産・おっぱい・建築。



有限会社モーハウス  
平成9年に創業。母となった女性のライフスタイルをより自由なものに変えていくことを志し、授乳服という“ツール”を用いてビジネスと社会活動の両輪で取組を展開している。従業員の多くが子どもを持つ女性であり、子育てという「制約」を多様な工夫で乗り越えながら円滑な業務実施体制を築くとともに、社員の継続的なキャリア構築を支援している。

年表

22歳 美術・建築系の編集の仕事に携わる

30歳 フリーの編集者に

33歳 次女を出産。授乳服製作のモーハウスを設立

41歳 東京青山にショップを開業。愛・地球博で授乳ショーを行う

44歳 平成21年度(第6回)女性のチャレンジ賞受賞

48歳 NPO法人子連れスタイル推進協会設立

49歳 平成25年度ダイバーシティ経営企業100選受賞。APEC(北京)で、日本の女性起業家を代表してスピーチ

普通の主婦が、  
気がついたら起業していました

最近の傾向として、社会起業家やアントレプレナーに注目が集まっているということもあり、私がおっぱいという紹介されることもあるのですが、実は、自分としてはピンと来ていないんです。基本は主婦なので、あまりリスクがあることはやりたくないですし、起業するぞ！と意を決して、モーハウスの事業を始めた訳ではないのです。

次女が生後間もなくの時に、つくばから東京に移動している途中、中央線の車内でお腹がすいてどうしても泣き止まないで、思わずその場で授乳したという体験がありました。今思えば、一度電車を降りるとか、いろいろ選択肢はあったと思うのですが、その時は、もうそうするしかありませんでした。そんな経験をしたので、外出先でもおっぱいをあげることができる服があったらいいのと思いき、まず、市販品を探してみましたが、しかし、授乳する時に胸がちんと隠れる商品が見つけれなかったのです。それならまずは自分で作ってみよう、軽い気持ちで始めたというのが事の真相なんです。しかし、私には実際にモノを作る技術がありません。そこで、周囲の人に、授乳時以外は胸が見えない服があったらいいなと思っていると話すようになりました。そうすると、なんか面白そうだから手伝うよという、専門家の方が、それぞれ集まって来てくれて、気がつくにつれて試作品作りをはじめ、試行錯誤を繰り返して

う。もともと私自身もスタッフも0歳の子を連れて仕事をしていました。それに対する新聞での取材がきっかけで、このスタイルの発信を続けています。

きつと、私の気持ちの中に、モーハウスという事業を通して、時代や社会を編集したいと思っているんでしょうね。ある意味、モーハウスは、メディアなのかもしれないですね。実際に、子連れ出勤の話も聞いて、実は親の介護で悩んでいます。自分も親連れ出勤をしないと、とある男性の方が話してくれたりしました。これは嬉しかったですね。親連れ出勤という新しい視点が誕生したのです。

また、授乳服の次に、子どもがおっぱいをほしがるときに、素早くおっぱいをあげることが出来るような授乳用のブラも開発しましたが、それを、乳がんと患った方が使いたいとおっしゃってくださいました。開発時にはそこまでは気がつきませんでした。乳がんの患者さんにとっては、切除した後の傷口がどうしてかデリケートで痛むため、素材の優しさや傷口に当たらないということが、これがいいと逆に新しい使い方を教えていただきました。誰かの為にと考え抜いて丁寧に作ったものが、別の方のニーズにも合うということ、まさにそのプロセスやプロダクトが、ユニバーサルデザインであるということに気づかせていただきました。これもまた、新しい社会の見方だと思えます。

おっぱいをきつかけにして  
もっとみんな自由になってほしい

平成26年5月のAPEC女性と経

ながら、第一号の授乳服を販売するまでの期間が、実は、驚くことに4か月くらいだったんです。きつと、私に強いリーダーシップがないので、手伝ってあげないと、みなさんが思ってくれたんだと思います。前職で編集の仕事をしていたので、自分が出来ないかわかれば、出来る人を探して頼めばいいということも素直に出来たからかもしれません。以来、ずっとそんな感じでやってきてます。私のアイディアや思いを素材にしてもらって、多くの方に手伝っていただいて、自分が想像する以上の事件が起きた時には、本当に嬉しいですね。

時代や社会を面白く、  
編集したいという気持ちがある

今、子連れで出勤しようという呼びかけも行っていますが、社会の課題を解決したいと信念を持って行動したというよりは、こんなこともあるけれど、面白くない？と投げかける感じが、私にはびびります。その結果、提案したことが社会に伝わり、変化の兆しが見え始めると、嬉しいのです。

今、モーハウス本社では一日約15人くらいのスタッフとともに、4、5人の子どものたちが一緒にいる。それが私たちの職場の普通の風景になっています。授乳しながら会議に参加する時もあります。かつては日本も農村社会でした。家族で働いている時には、父親も母親も一緒に働き、その場に子どもが一緒にいるのは当たり前だったはずなんです。でも、かつては普通だったことが、今の私たちの社会では、なぜ出来ないのだから

済フオーラム(北京)の中でお話したことにも重なりますが、授乳をしても授乳しているように見えない授乳服や、授乳しながらでも仕事ができるワークスタイルの提案を通じて、みなさんと一緒に考えたいことは「自由」ということなんです。お母さんの子どもへの授乳という行為をきつかけにして、男女別なく多くの方が、それまでの思い込みや自分たちで作りに上げてきた制約から一旦、解放放たれて、ぜひ自由になってほしいと思っています。授乳のことを考えると、行動半径が狭くなってしまうたり、外出が億劫になってしまったり、外出先で会う方々の、子どもをみるまなざしの優しさに触れることもとても大切なことだと思います。

また、職場に子どもがいることで、多くの大人が忘れていた、素直な笑顔の素晴らしさ、子どもの持つ幸福力にあらためて気がついて欲しいと思います。多くの大人にとって、子どもの存在は時として秩序を乱し排除すべき存在になることもありますよね。それは子どもには罪はないと思うのです。おっぱいが多い人々の気持ちを楽にして、自由にして、そして、あらためて社会とつながるきつかけとなって欲しいと心から願っています。



(文・船木成記)

# 女性が やりたいことをあきらめず、 才能をのびやかに 発揮できる社会を作りたい

それをいつも後押しして自分でありたい



福岡県男女共同  
参画センター館長  
株式会社  
アヴァンティ顧問

## 村山 由香里氏

略歴 福岡県福岡市生まれ、福岡市在住。九州大学を卒業後、化粧品メーカー、情報誌の  
営業・編集を経て、平成5年に有限会社ファアップ(現・株式会社アヴァンティ)を設立  
し、情報誌「アヴァンティ」を創刊。平成22年3月に社長を退任して顧問に。同年4月より福岡県男女  
共同参画センター「あすばる」館長。平成14年全国商工会議所女性会連合会「女性起業家大賞」奨励  
賞、平成16年「福岡県男女共同参画企業賞」受賞。

**株式会社アヴァンティ**  
平成5年、村山氏が設立。設立時から情報誌「アヴァンティ」を毎月発行している。現在はさらにコミュニティサイトの運営、イベントの企画・運営、マーケティングやプロモーションなども手がける。創業の理念は、「女性がいきいきと自分の可能性を発揮して活躍できる社会へ、社会変革の原動力になる」。現在の社長は2代目で、創業2年目からのメンバーである清澄由美子氏(中央写真左)。



**年表**

**22歳**  
大学卒業と同時に化粧品会社へ勤務。3年後に退職

**29歳**  
市役所の臨時職員を経て、地元情報誌2誌で営業と編集を8年経験

**34歳**  
自宅マンションで有限会社ファアップ(現・株式会社アヴァンティ)起業。「アヴァンティ」創刊

**49歳**  
平成20年度(第5回)女性のチャレンジ賞受賞

**50歳**  
アヴァンティの社長、編集長とも退き顧問  
福岡県男女共同参画センター「あすばる」館長に就任

”おかしいことを  
”おかしい”という

22歳で就職するとき「おかしい」と思いました。男女雇用機会均等法ができてきたから、採用は男子のみという会社が大半。同じ大学を卒業したのに男子と女子はなぜこんなに違うのか。当時珍しい男女同一賃金の化粧品メーカーに入社しました。「おかしい」と思うことははつきり言うタイプでした。仕事はおもしろかったのですが、自分の将来が見えずもつと能力が発揮できる仕事をしたいと先も決めずに3年で退職しました。でももつとおかしい、と思ったのは市役所の臨時職員になった時。正規職員はほとんど男性ばかり。臨時職員は若い女性ばかり。その女性たちが全職員に一日4回お茶くみするシステムなんです。女性は本当に能力がないのだからか、そんなはずはないと、愕然とする思いでした。その時、たまたま目の前にあった情報誌を手に取り、編集局に電話をして「アルバイトはありますか？」と聞いていました。

そこは働く女性向けのミニコミ誌を作っていて取材も営業も配達も全部自分でやりました。色々な職場を回って自分と同じように働く大勢の女性に出会え本当に楽しかった。仕事も夢中でしたし、何より仕事で出会った女性同士でネットワークができ、旅行もしたし悩みも相談しあつてお互いに刺激になりました。ふとしたきっかけで女性が仕事ができるようになって、どんどんきれいになっていく。大事なのは一歩踏み出すちよつとした勇気なんだなって

**50歳で行政の世界へ。  
17年間育てた会社を退く決断**

49歳で内閣府の「女性のチャレンジ賞」を受賞し人生が思わぬ方向へ変わる事になりました。授賞式では当時の福田康夫総理の話で国は目標をもって男女共同参画を進めていることを初めて知つたし、日産自動車のゴーンCEOの基調講演を聞いてトップダウンで女性活躍を進めていらつしやる様子に驚き、頼もしく思いました。福岡に戻つたある日、一本の電話があり福岡県男女共同参画センター「あすばる」館長への就任を打診されました。迷いました。民間企業の役員を退くことが条件だったからです。でも、これまで働く女性を元気に、女性が活躍する社会に変えたいと活動してきたけれど、女性の意識は変わつてきた、男性や経営者の意識、行政や政治の問題も大きいと思つており、福岡県全体に行政の立場からアプローチできるのは魅力的でした。副社長として私をずっと支えてくれた清澄さんが社長就任を決意してくれ、また私の背中を押してくれたことで、私も決意しました。

館長になって最初に方針を2つ立てました。1つは働きかける対象者を広めることです。女性団体だけでなく、働く女性、企業、経営者、子育て中の女性、大学生など。2つ目は情報発信の拡大です。デザインを一新しリアルな情報を更新し、ネット上で講座の申し込みをはじめたら飛躍的にページビューが伸びました。また、女性起業家支援セミナーやフォーラムなどで、経

この時たくさんの実例をみて思いまし  
た。

女性が  
活躍できる社会づくりを、  
後押しする会社を作りたい

地域情報誌は地元の人と人をつなぎ、勇気や元気を感ずてもらえるのではないかと。そう思って34歳のとき、自宅マンションの一室で起業し、「アヴァンティ」の創刊号を出しました。未経験者6人での創刊でしたが、2年目頃から、かつて一緒に働いた女性たちが集まってきた。今の社長の清澄さんは最初の化粧品会社の同期です。小さいお子さん2人の育児をしながら「あなたの夢を私も一緒に追うわ」と言ってくれ本当に嬉しかった。前の雑誌で一緒だった仲間たちもあちこちから集まり入社してくれ大きな力になりました。新卒採用をはじめ20年近くになりますが、育児休業しても必ず皆戻ってきてくれる。皆でサポートしあつてがんばれるとてもいい職場になりました。

アバンティが創刊以来変わらなないのは、ただ情報を発信するだけでなく、情報を受け止めてくれた人同士をつなぐ役目を果たしたいということ。人は集えば刺激を受けるしお互いに力になれます。そして会社としては、女性がやりたいことをあきらめずに活躍できる会社を作りたい、それを後押ししていただける会社でありたいと思つてやっています。読者や若手編集者にもどんどん企画を任せます。それを通じて皆が成長する、そういうことをずっと続けて来ました。

経済団体と連携を深めてきました。平成24年には、「女性活躍フォーラム」を開催しましたが、経済界と九州経済産業局、男女共同参画の関係機関が連携したかつてないイベントとして500名の会場が熱気にあふれ、経営者や管理職、女性たちが話に聞き入りました。また講座と課題研究を組み合わせた「ふくおか女性いきいき塾」を開講し、若い世代のリーダー候補を育成しています。今、福岡では経営者団体や知事・市長、大学、民間企業など産官学民が連携し「女性の活躍推進福岡県会議」の取組が始まっていますが、この取組でも役目をしっかりと果たして九州から大きなうねりを作り出せたらと思っています。

50歳になって行政機関の長への転身、という大きな変化がありました。個人的に良かったことが2つあります。1つ目は自分自身が何者であるか、強みが何か確認できたことです。私はやはり起業家であり、経営者の経験が自分を作ってきたとわかりました。2つ目は私が退任したことでアヴァンティのメンバーそれぞれが目覚ましく成長したこと。副社長が社長に、副編集長が編集長に。そして皆が1つずつステップを上げ、私がいたとき以上の業績をあげています。理念を受けつぎ発展させてくれる。本当に嬉しいことです。

今の館長の仕事には任期がありますので、また私の人生は新たな展開をすればいいです。それがまた、楽しみでもあります。女性が活躍する社会に変えたという思いは変わりませんが。

(文・高村 静)



## 内閣府男女共同参画局総務課

〒100-8914 東京都千代田区永田町1-6-1

TEL:03-5253-2111(代表)

FAX:03-3581-9566

ホームページ:<http://www.gender.go.jp>